



キャンパス・コンソーシアム函館
合同公開講座

函館学 2012

第3回講座
講義資料

「地域学」から見えてくるもの

高橋 豊彦 知内町郷土資料館 学芸員

根本 直樹 北海道教育大学函館校 教授

日時：平成 24 年 7 月 21 日（土）午後 1:30 ～ 3:00

会場：ホテル法華クラブ函館

主催：キャンパス・コンソーシアム函館

講師略歴

たかはし とよひこ

高橋 豊彦氏 知内町郷土資料館 学芸員

専門分野は日本古代史。

1952年江別町（現江別市）に生まれる。1977年専修大学文学部人文学コース史学科卒。1978年和光大学で学芸員資格習得。1978年7月 江別市文化財事務所に勤務して資料整理に従事する。1982年北海学園大学で図書館司書の資格習得。1983年財団法人北海道埋蔵文化財センターに勤務し、湯の里遺跡の発掘調査に従事。1984年新設された知内町郷土資料館に学芸員として赴任。以後「みて・きいて・ふれて・考える」をモットーにモノを媒体とした博物館活動を行ってきた。2012年3月退職。4月学芸員として知内町郷土資料館に勤務。著書に「しりうち昔話-児童のための伝説集」 編・著「日本歴史地名体系：北海道の地名」共著（平凡社）ほか。

ねもと なおき

根本 直樹氏 北海道教育大学函館校 教授

1954（昭和29）年茨城県生まれ。駒沢大学人文科学研究科地理学修士課程修了。1981年函館市に奉職。市立函館博物館、市史編さん室に勤務ののち退職。2000年より北海道教育大学函館校で教鞭をとる。学外での活動として函館西部地区などをフィールドに大学生と小中学生らがともに学びあう「まちワーク研究室」を主宰。現在、北海道教育大学附属函館小学校長。

「地域学」から見えてくるもの

北海道教育大学函館校根本ゼミと知内町郷土資料館のコラボレーション

1. 「知内学のすすめ」開設にまで

- ・博物館を育てる風土
- ・博物館は総合的な学問
- ・生涯学習社会における博物館
- ・地方史ではなく郷土学
- ・なぜ実施しようとしたのか
- ・郷土資料館の役割

2. 「知内学のすすめ」のあゆみ

- ・平成17年度から開始した知内流「知内学」の試み

1. 「知内学のすすめ」の開設まで

- ・博物館を育てる風土
- ・博物館学は総合的な学問
- ・生涯学習社会における博物館
- ・地方史ではなく郷土学
- ・なぜ実施しようとしたのか
- ・郷土資料館の役割

博物館を育てる風土が、日本に欠けていたといわれているがその理由は、寺小屋時代の昔から勉強の基本は「読み・書き・そろばん」だったからである。

翻って西洋では「モノを教えること」が学習の基本だった。これは紀元前300年頃ギリシャ人によるエジプトのギリシャ化政策に必要な教化のために博物館(Mouseion ムーゼオン)が創られ利用されたことから始まる。今や社会のないところには、博物館は育たないとまでの認識になっている。

かたや日本の博物館事始めは、明治時代開拓使に雇われた米人ホーレス・ケプロンに始まる。そのためか現在も博物館の数は西高東低の傾向にあり、都道府県別では北海道が長野に次いで多いのもケプロンが蒔いた種が育ったためとも言える。

アメリカでは開拓のため新しい土地に入植するとき最初にしなければならないことは、その土地の風土を知ることであり、そのための役割として博物館があった。そのアメリカの開拓の知恵を北海道の開拓に導入しようとしたのがケプロンなのである。

博物館は物質文化を媒体にした生涯学習センターであるべきである。

学芸員は人とモノとつながりをつねに考えていなければならない。そして学芸員の能力によって古里の味を削られる。また、学校教育との関係の中での学芸員の役割のひとつとして、学校と連係して郷土学習の方法論を作成しなくてはならない。これについては、司書教諭と同様な学芸教諭を設置できれば充実した郷土学習ができる。

博物館学とは美術館学・動物園学・狭義の博物館学全体を含めたものである。例としてある特定資料を考える上で博物館学的発想によって考慮することは、歴史・考古学・民俗学・自然科学・気象学等あらゆる総合学的学問である。すなわち人文科学と自然科学の融合した学問であり事

業である。そして博物館の情報伝達とは資料の展示にある。

博物館・資料館・記念館に対して一般的に誤った認識がある。特に多く見受けられる例として、博物館は規模が大きく、資料館は小さいといった類の偏見である。

博物館・資料館・記念館と呼ばれる名称の違いは機能の違いによるものであることを理解されるべきである。一名は体をあらわす。

1. 記念館の機能は、収集・保存・教育(展示)。
2. 資料館の機能は、収集・保存・研究。
3. 博物館の機能は、収集・保存・研究・教育(展示)。

1は研究をしない施設。2は教育(展示)をしないで研究だけに没頭すればよい施設。3はバランスよく活動する施設である。

郷土学(独^{ハイマートランド} HeimartKunde 郷土研究)を考慮しなくてはならないのがこれからの博物館の向かう方向であるとも考えられる。

※Heimart Museum (郷土博物館)

ところで、日本では大正～昭和初期にかけて郷土史(誌)ブームがあったが、博物館建設の機運にはいたらなかった。この理由については、日本人にはモノの収集よりも文献に対する信奉に根強いものがあるとせいと思われる。

〇〇学と呼ばれる地域を冠にした「学」の使用は、「古くは1975年(昭和50年)にオープンした『秋田県立博物館』が『秋田学』を掲げ、博物館と地域学を結びつけた新しい地域博物館のあり方として注目された。そこでの『秋田学』は、『郷土学』として、また『風土学』として定義され、秋田固有の人文諸科学や自然諸科学などの諸学を秋田という風土(郷土)の視点から総(綜)合化していこうとする横断的な『学』の確立であった」

また、「近年の地方分権化のうねりは、いきおい地方に自立を求めることになり、当地の活性化に地域学を取りこみ、活用していこうとする動きが各地に見られるようになってきている。

地域の個性化、アイデンティティの確立が、これまで以上に強く求められ、勢いを増しているのである」

『秋田学』の膝元である鹿角市でも、市長自らの肝いりで、「鹿角学」が提唱され、「市民力」による市勢の挽回と再生が、地域経営の主要テーマとなっている。2001年10月23日には地元鹿角市で『鹿角学セミナー』が開催されるなど、『産、官、学、市民が手を携え、地域の優れた資源、能力を発見・発掘して新しい息吹を起こし、地域が生きる理念を考える』試みが軌道にのるかどうか、その行方が注目されている」

「さらに10年くらい前から、地域学や郷土学に代わる『地元学』という名称で、新たな地域学が提唱され、地域づくりの有効な手法に加えられてきている。この『地元学』については『地域から変わる日本－地元学とは何か』（農文協「現代農業」2001年5月増刊号）としてまとめられ、報告されている。本書の編集主幹である甲斐良治氏は、この『地元学』を『地元に暮らす人（土）にとっては当たり前にあるもの（地域資源）やこと（生活・生産文化）の価値や意味を、外部の人（風）の視点も借りながら掘り起こし、地域づくりに生かすもの。従来の郷土史や民俗学、地域学と異なり、住民自身が当事者となって調べ、考え、ものや地域、生活をつくっていくことをめざす。成果が調査者に独占されたり、ただ何かを知って満足するだけの『もの知り学』には終わらない。』もの（毎日新聞2001年7月2日付コラム記事「発言席」より）と定義づけている」

地域で活動する博物館は、地域の伝統文化の保存や継承を担うとともに新たな文化の創造や発信の中核機関としての位置づけにあることを理解しておくべきである。そのため博物館が準備しておく機能を自覚しておく必要がある。

知内町郷土資料館では、いくつかある普及活動の中の一つとして平成9年度から年1回だが「ふるさと講座」を実施してきた。

趣旨は「風土と伝統によって培われる『郷土』は、その地域の共同体や個人の人格形成に多大な影響をおよぼすと考えられる。そのような『郷土』について、考えそして理解を深めながら郷土

愛を育むとともに町の活性化につながるような人材を育てることを目的として本講座を開設する」である。

そして平成12年頃から郷土資料館から発信する事業ということで「ふるさと講座」の拡張ともいえる「〇〇学」的な事業の開催を考えてきていたが、講師や事業内容そして進め方などを考えると難しく思われ、なかなか実行にまでいたらなかった。

ところが平成17年、諸般の事情から急遽おこなうはめになった。陳腐なたとえであるが、清水の舞台から飛び降りるような心境であった。

当初予想していた参加人数は10名程度で、小ぢんまりと実施するつもりでいた。「健脳講座：郷土資料館ゼミナール・知内学のすすめ」という事業名と「学びは究極の道楽」キャッチフレーズで募集したところ、30代から80代まで31名の参加者があった。

中高年の方々を中心に自分たちの住んでいる郷土（地域）のことを「知りたい」「学びたい」「発言したい」という意識が高まっていた時の受け皿になったということであり、時宜にかなった講座であったのだろうと考えている。

知内町における郷土資料館の役割は何かということは、これまでも発信して来たが、ここに改めて列挙してみる。

- ・蓄積してきた文化的資源の情報を発信し地域振興の役に立てる。
- ・地域住民との交流、対話をとおして人脈のネットワーク化を図る。
- ・郷土資料館の機能（展示・保管・調査・研究）を開放することで大学における特任教授的な特任学芸員（以前なら特別学芸員）等を設ける。
- ・地域住民が所有する文化財やコレクション等を公開する場の提供をはかる。
- ・地域住民が所有する文化財やコレクション等の保存・修復・展示に関する知識と技能に対して支援センター的役割を担う。

その集大成が「知内学」ともいえる。

【参考文献：郷土資料館経営の考え方H4（高橋）／地域博物館における地域学文環研レポート（文化環境研究所代表・高橋信裕）】

2. 「知内学のすすめ」のあゆみ

平成17年度から開始した知内流「知内学」の試み

知内学のすすめ：「健脳講座：郷土資料館ゼミナール」として2005年度（平成17）から実施

開設趣旨

学ぶということは人生を過ごすための最大の道楽であると考えられる。社会科学・人文科学・自然科学など多様な郷土に関係する講座を実施することで教養を高めるとともに受講者の「自学自習」の手がかりとする。

あわせてそれぞれの人生で得た知識の体系化をはかりその発表の場とする。

テーマ 「学びは究極の道楽」

進め方

- ・ 郷土の歴史や自然そして社会生活（文化）などについて学ぶ
- ・ 自学自習の場。
- ・ 少人数で討議形式（ゼミナール）ですすめる。
- ・ 年間10回程度の講座を開催する。
- ・ 参加者各人の豊かな経験に基づいた意見を対話形式で述べるができるように運営する。
- ・ 本講座をとおして知的好奇心を満足させながら、学ぶことの楽しさを認識してもらい、脳の活性化をうながす。
- ・ ミュージアム・パルの事業や公民館講座ほかの他機関の事業と連動させる。

開催期間 通年

対 称 高校生以上一般成人

募集人員 20人程度

会 費 スポーツ安全保険を含めて1,000円とする。材料代等がかかる場合は別途徴収。

周知方法 新聞記事・ポスターの掲示。

関係団体及び高等学校にはチラシ配布とポスター掲示。

開講以来の会員数と内訳（年度ごと）

平成17年度	女 4名	男 27名	計 31名
平成18年度	女 5名	男 30名	計 35名
平成19年度	女 10名	男 33名	計 43名
平成20年度	女 4名	男 30名	計 34名
平成21年度	女 8名	男 33名	計 41名
平成22年度	女 4名	男 30名	計 34名
平成23年度	女 4名	男 33名	計 37名
平成24年度	女 5名	男 36名	計 41名（知内29 木古内7 松前4 福島1）

今までに開催した主な講座名と概要

1. 「しりうち 800 年について」—中世・近世—
 - ・ 知内を含む道南の特徴についてふれる。
 - ・ 大野土佐日記の史的価値。
 - ・ 道南12の館（南條氏と脇本館）

・ 知内川と砂金資料及び砂金が出る地質。

2. 「しりうち 800 年について」—近世—
 - ・ 関ヶ原の合戦と松前藩
 - ・ 荒神社と雷公神社

- ・交易と産物
- ・知内を通過した人たち
- ・参勤交代の一口知識
- ・知内と木古内の村境と建川塞門跡
- ・箱館戦争と知内

3. 郷土の自然「活断層探し」

断層について講義を受ける。昭和20年代の米軍が撮影した航空写真を活用しながら地形の変化から活断層をわかりだす。講義終了後さらにくわしく聞くために講師を囲んだ交流会を開催。

4. 「郷土の自然「活断層探し」—実習—」

- ・森越・中ノ川地区に行き土層の学習や活断層探しをおこなう。

5. 「チョウとオサムシから見る知内と渡島半島」

—渡島半島は北海道なのか—

知内を含む渡島半島は行政区域は北海道ですが自然界から見ても北海道なのでしょうか、今回はチョウとオサムシなどの昆虫類から考える。

6. 「資料でたどる郷土の歴史」

- ・元久2年(1205)甲斐の国から砂金を求めて荒木大学が訪れたという伝承の根幹をなす「大野土佐日記」の特別公開。
- ・室町期にあった道南12館のひとつ脇本館の館主だった南條家に伝わる資料が、昭和9年札幌市でおこなわれた「松前懐古展览会」以来の71年ぶりの公開。
- ・余市町大川遺跡から出土した3面の和鏡や箱館戦争に関係する貴重な資料など、中世から近世にかけての文書資料や考古学資料を活用して説明。

7. 写真と流行歌で……

戦前・戦中・戦後をたどる—我ら昭和の子—
「写真と流行歌」を鑑賞して会員各々の育ってきた時代を、追体験するだけではなく、矢越の海の幸を肴に、世代間を越えた団らんの場を過ごす。

8. 「今、脳が面白い」—記憶と学習、病気からの予防—& 自分史年表作成法

右脳・左脳・脳梁といった脳のメカニズムだけではなく、脳梗塞などの脳血管障害やアルツ

ハイマーなどの病気による認知症のボケのほか単なる加齢によるボケの予防という観点も含めて講義。

9. 「野鳥から道南の自然を探る」

道南の自然環境を野鳥の生態から考える講座。

10. 「郷土の歴史—近世・近代・現代—」

郷土の歴史&現代史入門あつたときあなたはどこで何をしていたのか？

11. 「郷土の歴史と伝説—岬伝説をたどる—」

大野土佐日記等を活用して町内の岬伝説について学ぶ。

12. 「岬伝説をたどる—矢越岬紀行—」

船で矢越岬周辺を見学しながら岬伝説について考える。(定員10名)

13. 「砂金掘りに挑戦—実習—」

知内に来た最初の和人は、砂金掘りに来た人々だという伝説の知内の歴史追体験のため砂金掘りを行う。

14. 「ふる里再発見の旅—箱館戦争をたどる—」

知内も戦場になった箱館戦争について学ぶバスツアー。市立函館博物館、五稜郭等戦跡を歩く。

15. 「神社と祭」—知内の神社をとおして考える—

本道最古の神社である雷公神社に伝わる神事や祭をとおして郷土の歴史や文化について学ぶ。

16. 「渡島半島を植物から探る」

—写真展道南に咲く野の花の姿—

草花をとおして渡島半島及び渡島南西部の特徴を学ぶ。

17. 学びについて

「教育者人生60年…学びの世界」

人生にとって学ぶ事がいかに大切であるかを理解するための講座。

18. 「黄金伝説と知内そのいわれ」

—大野土佐日記から考える—

町内に伝わる大野土佐日記などの文献資料を参考にしながら知内の中世の歴史を学ぶ。

20. 「健康と生活習慣との関係について」
—血液サラサラ（高脂血症予防）講座—
健康と生活習慣との関係について知っているようで知らない不可解なことを循環器の病気の専門医の講話で理解を深める。
21. 「戦中派の人生模様」
—聞取り：シベリア抑留時代—
日中戦争（支那事変）・太平洋戦争（大東亜戦争）徴兵・学徒勤労動員・空襲・学童疎開・抑留について当時の新聞資料や映像のほかシベリア抑留体験者の話を題材に現代の礎となった時代をふり返る。
22. 「松前神楽について知る」—鑑賞会—
知内の雷公神社で舞われる松前神楽を鑑賞する。道南の松前神楽の文化的価値は、未だ世俗化されずに神事として行われ、地域住民の生活に密着していることを理解する。
23. 松前家家宝銅雀台瓦硯は
なぜ北から来たのか—北方史を学ぶ—
銅雀台瓦硯をとおして15世紀の北東アジアの情勢とアイヌの様相そして松前藩との関係について学ぶ。
24. 写真と映像が語る「しりうち今昔物語」
—村から町への歩み—
村から町になって40年を迎えた節目の年を町制施行時の昭和42年頃の写真と映像そして流行歌で回想する。
25. 「歴史と地名をたどる旅」
—東北：歴史と地名面白巡検—
青森県八戸市の「尻内」や岩手県田野畑村の「矢越岬」など知内にある地名と似た地名のある場所を訪問し、地形等を観察しながら東北の歴史と地名を学ぶ。
26. 「北海道開発局と戦後という時代」
—開発局が生れた理由とは…謎に迫る—
昭和26年に設置された開発局の設立にかかわるあまり知られていない理由を学びながら占領下日本の混沌とした時代を振り返る。
27. 「近江聖人中江藤樹の思想と生涯」
～孝を求め、徳を養う生き方～

混沌とした現代において何が欠けているのかを考えるため、誰もが一度は耳にしたことがある近江聖人と呼ばれた中江藤樹の思想について学ぶ。

28. 「なぜ！厚沢部に館城が築かれたのか」
—箱館戦争で落城した城跡から探る—
日本最後の内戦箱館戦争と知内
明治元年に築かれた館城の性格について発掘調査によって判明したことを通じて学ぶ。
29. 「縄文文化について、一考察」
—縄文人の死生観—
山猫博士による考古学者や歴史家の従来の視点とは異なる芸術家の感性を切り口にした土偶や土器の観察から考えた縄文人の死生観、と縄文文化について語る。
また、民俗事例や漢字の元になった甲骨文字などから蛇にまつわる日本の古層文化についても興味深い話を聞く。
30. 現代史 郵便局と庶民の暮らし
—知られざる郵便局—
・郵便局誕生の歴史
・特定郵便局制度の特徴
・知内町内の郵便局誕生の歴史
・郵政民営化によって地域はどうなったのかなど興味深い話を聞き郵政民営化に対する疑問等が氷塊する。
31. 詳説 知内の歴史—旧石器時代編—
旧石器時代の知内と日本・アジア・世界について学ぶ。日本最古の墓の出土地知内の旧石器時代について世界の旧石器時代との比較から興味深く学ぶ。
32. 旧道探検隊
—歴史・植物と野鳥の観察—
昔むかし松前線があったころ並行してわきに道が通っていた。
今回はその昔の道を探検しながら、植物や野鳥の観察会を行った。この付近は、なぜか東北地方で見られる草花を観察できる場所だといわれているところを確認する。
33. 日持上人渡道伝説
—勝本館主南條季継氏との関係を探る—
般若法華の地名伝説や魚の名前伝説などがあ
るほか義経伝説など後世にいろいろな意味で

影響を与えている日持上人をとおして北の宗教やそれに係わる伝説を興味深く学ぶ。

34. 版画との出会い—版画からすべてを学んだ—
版画歴40年の藤田健一氏が俳句会報「のすり」の表紙に使用した版画や児童の作品を例示しながら、版画制作の摺りの部分を見てもらい、本来油絵を得意としていた氏が、版画と出会ったいきさつやその魅力について語る。
また、原作品と複製画とで芸術鑑賞の違いがあるのかなど、日ごろ疑問に思っている芸術鑑賞の解決の糸口として役立つ講座です。

35. 音楽家が語る
歌の魅力と不思議—東洋と西洋の文化の違いが発声や歌唱に影響を与えているか否か?—
人類の歴史の中で音楽の発生やその役割について解明されていませんが
今回は「歌(声楽)」という人間の声による音楽に焦点を当て、歴史や文化が「歌の魅力と不思議」にどのようにかかわっているのを学ぶための講座を開催する。

36. 道南地域における青年学校の開設状況—技術教育を中心に—
[戦前の社会教育的機関、働きながら学ぶ場「青年学校」について知る]
戦前文部省と陸軍省による協力体制の下で、「実業補習学校」としての職能実務教育と「青年訓練所」としての軍事教練を両立させ、戦争遂行の面もある青年学校。戦前の社会教育的機関とも考えられる青年学校のことを、青年学校が開設される背景やどんな学校だったのか。そして各地(松前・知内・木古内ほか)の青年学校について学ぶ。

37. 日本語について考える
—生活のなかで生きている仏教語をとおして—
それ自体難解で理解しがたいと思われている仏教で用いられている言葉が、日本語の中にどのように取込まれて、ふだんの生活で何気なく使用されていることを学ぶ。

38. 浦元出土古銭の謎に挑む
—本邦初出土のベトナム古銭「開泰元寶」について—
ベトナムのハノイ周辺で発見された一括出土銭に含まれている銭貨の種類およびそれらの割合を明らかにした専修大学の三宅先生を

招いて、浦元で出土した「開泰元寶」歴史的意味について話す。

39. 「菅江真澄の旅からみる松前東在の暮らし」—松前と箱館の間—
漂泊の紀行家菅江真澄をとおして江戸時代後期の渡島南西部の機相を福山街道を沿いの集落を中心に学ぶ。

40. 重要文化財指定20周年記念文化財保護物語
「文化財を守り、伝えることの喜びと難しさ」
極彩色の壁画が有名な「高松塚古墳」や「キトラ古墳」の保存、そして昨年話題になった「平城遷都1300年」を迎えた事業で、象徴的につかわれていた「平城宮第一次大極殿」の復元にかかわった経験をとおして、文化財保護への思いを語る。
また、湯の里4遺跡で出土した副葬品が、重要文化財指定になった経緯についてもふれる。

考古学物語

「日本最古の墓出土品の歴史的意義」

湯の里4遺跡で発見された日本最古と考えられている墓と出土品が、歴史的にどのような意味があるのかを発掘当時のことをまじえながら話す。

41. 日本・英米開戦から70年—あの戦争を物語りにしてはならない—
昭和16年12月8日午前7時の開戦を告げる臨時ニュースが、ラジオ放送から流れる以前、特に満州事変以降から日中戦争(当時は支那事変)にかけての社会状況を理解できるように歌と映像等ですすめる。